

生分解性プラスチックの適正使用のための分解菌データベース作成」
(中間評価)

質問・意見

回答

F委員	<p>どのようになればいいのか、研究の目的がわからないのですが。</p>	<p>生分解性プラスチックが本当に分解されるのか、分解過程において、特定の微生物が働いているのか調査しております。</p>
	<p>東京から仕入れたものが岩手で廃棄されれば分解されないということですか？</p>	<p>土壌の温度が異なるので、分解が遅い可能性があります。</p>
B委員	<p>素材の種類(ポリ乳酸と有機酸系)と製品の形態が大きな問題と思うのですが、それをどのように評価するのか、研究の目標設定はどうなっているのですか。将来、生分解プラの割合が10%になるというが、价格的に問題はないのか、石油化学系の150円に対抗できるのでしょうか？</p>	<p>様々な製品が、たとえばCDの包装などに利用され始めており、日本で本格的に実用化される前に、微生物に関する基礎データを集めておく必要があるとの環境省の判断です。一定の大きさの崩壊強度試験材を用いて、分解の程度と働く微生物を調査します。 ポリ乳酸系のものが7,8年前800円/kgしたものが300円になっている。デンプン系の生成速度の向上、セルロース系の利用方法の検討を総合的に発展させて100円程度を目標としている。アメリカではトウモロコシ系は10円/kg、トヨタがインドネシアで行うのはサツマイモ系は18円程度でできています。</p>
A委員	<p>生分解性を確認して製品化しているのではないのですか？</p>	<p>生分解性の国際規格では高温(約60℃)コンポスターで分解すればいいこととなっている。コンポスターでは分解するが、実際の土壌でどの程度分解するか把握しておきたいということです。</p>
B委員	<p>燃料として使った方が安上がりで効率的ではないですか？</p>	<p>トレーやゴミ袋に使われるので、多水系の廃棄物と一緒に収集されるため、分別して燃料にするより堆肥化するほうが効率がよいのです。</p>
	<p>石油系のもので混合されたら問題があるのではないのですか？</p>	<p>混合されれば処理が複雑になり問題です。また、分解性を強調するとポイ捨てを助長することになりかねないので、制度が必要です。制度を検討するためにもデータをとっておきたいというのが環境省の姿勢です。</p>
D委員	<p>全体の政策から見ても重要と考えます。ところで、どういう場所をサンプリングするのですか、県内を網羅して実施するのですか？</p>	<p>1件のみ、農業研究センターの栽培されていない土壌で実施しています。土壌自体の元データがしっかりしているのでここを選びました。この調査で問題が発見されれば、地点を増やし定期的にモニタリングする事業に発展する可能性もあります。</p>
B委員	<p>製品としての混合物で試験しているのですか、それとも素材ごとに試験しているのですか？</p>	<p>素材毎に試験しております。</p>